

闇夜が訪ねてくる <1>

作: マックス一郎

あらすじ

歴史の裏に暗躍する人ならざる者たちの壮大年代記。

赤いコンテナが日本に到着した。

その中に異常な何かが潜んでいた。誰かの手引きで入国させたのか、目的は何なのか。

原始的な恐怖を起こすその異常な何かを阻止出来るか。

遡って12年前、一人の独裁者の死を巡り、動く一人の特殊な外交官。

未曾有の事態に立ち向かう者たちの物語がここにある。

現代とは異なる時間軸、架空歴史、改変歴史、パラレルワールド、吸血鬼、人造人間、クトゥルフ神話風の世界をご覧ください。闇夜・闇の評議会シリーズ3部作の1作目。

ブラム・ストーカー、キム・ニューマン、ギレルモ・デル・トロ、スティーヴン・キング、ディーン・R・クーンツ、希代の巨匠たちへのオマージュ作品です。

プロローグ・ことの始まり

17世紀のフランス。一人の老人と黒い影の男性は冬の夜にはじめて出会う。

フランス王国

サロン＝ド＝プロヴァンス町

1566年1月10日、夜11時頃

最近宮殿から声はかけられなくなり、老人はものすごく落ち込んでいた。

リウマチと痛風を患い、特に冬の寒い夜では病状が更に酷くなり、一晩中も眠れないことはしばしばであったほど。

近々、近所に住んでいる知人の公証人を呼んで、自分の遺言書作成をせねばと常に考えていた。

「春か夏になってから、色々と済ませて、休みたい」

と独り言をつぶやいた。

この悲しき老人は有名人だった。少なくとも王室と貴族の間では、崇める人が多くいたのは事実。

最近めっきり、利き手のリウマチの影響で物が書けなくなり、頭で何を浮かべても、文幸化できなかった。それはまた老人が落ち込む原因の一つでもあった。

今夜は何か違っていた、老人は暗くなり始めた頃、頭にあるイメージ映像が浮かんできた。

そのイメージは赤い目が光る黒い影の男だった。あの影の男が自分を訪れたら、今の苦しみはもしかすると終わりを告げる。はっきりとしたものではなかったため、可能性としてこの直感の外れるとも思った。

地中海の冬は比較的暖かったが、病を患っている老人にしたら、耐え難い寒さだった。

1階の自分の部屋、堅いベットで横になっていた老人は窓を見た。厚い冬用のカーテンの隙間から月光が漏れていた。

その時だった、老人は窓ガラスを叩く音を聞いた。

「偉大なる師よ、窓を開けよ。」

頭の中に声が響いた。

老人は暗くなる前に頭の中に浮かんだイメージは予知であったと理解した。そして黒い影の男は自分を探しに来たと察知した。それは意味するのは【死】かと一瞬思った。

「偉大なる師よ、窓を開けよ。」

再度声が響いた。

夜に訪れてくる闇の生き物について、老人は知識を持っていた。入る許可を求める存在について、

更に詳しく知っていた。病による痛みは耐え難いものだった。もし闇の生き物の糧として、人生が終わるのならば、それはそれでいいと思った。苦しみから解放されたかった。

ゆっくりとベッドから立ち上がり、力を振り絞って、部屋の窓を開けながら一言を放った。

「入ってよい。」

冷たい冬の風が一気に吹いて、一瞬老人は目をつぶった。

ゆっくりと目を開けて、家の外を見たら、庭や道路に誰もいなかった。

「夢だったか。」

と残念そうにつぶやいた。

後ろ、部屋の中から声は聞こえた。

「師よ。余に入る許可をくださり、感謝する。」

老人は窓を閉めた後、ゆっくり振り向いた。

身長は170センチぐらいで30代に見える、フードを被った中東系な顔立ちをしている若い男性が立っていた。男の目は赤く光っていた。

「あなた様は何者でしょうか。」

老人は慎重に声をかけた。

バリーヤ

「余は不可触民嫌われる者である。」

男は答えた。

「あなた様は死ぬ運命を待つ私を迎えに来たのか。」

老人は問いかけた。

「違う。余は偉大なる師であるあなたに頼みたいことがある。」

「こんな満足にもう体を動かさない老体では何もできない。」

老人は断った。

「医者、そして錬金術師として、余は師にお願いしたい。」

「医者ではあるが、錬金術は遥か昔にやめている。」

と老人はまた断った。

「やめていても、錬金術を忘れてはないと余はみている。」

男は老人に言った。

「部屋に入る許可を求める闇の生き物であるあなた様は、先の短い私に何を頼みたい？あなた様は永遠の命、永遠の若さを保ち、老いることなく過ごせるのに。」

と老人。

「師よ。余は死にたいのだ。それができるのは師しかいない。」

と男は切実な顔で老人に伝えた。